

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：24602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26760025

研究課題名(和文)日本人が参加する海外ボランティアツアーの文化に関する実証的研究

研究課題名(英文) Cultures and Experiences among Japanese Overseas Volunteer Tour Participants

研究代表者

薬師寺 浩之 (Yakushiji, Hiroyuki)

奈良県立大学・地域創造学部・講師

研究者番号：70647396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：カンボジアの孤児院を事例に、日本人が参加する海外ボランティアツアーの文化を批判的に考察した。海外経験初心者が多いために、ボランティア受入施設によって安全・安心・快適に「ボランティア」活動が行えるように様々な演出が施されていることがわかった。現地事情に明るくないツアー参加者による「ボランティア」は日本的価値観をもとに行われており、多少なりとも新植民主義的性格を帯びている。このような事実から、ボランティアツアーは受入施設の運営資金獲得には有効な手段であるが、参加者の活動がもたらす福祉的利益には疑問が残った。他者の不幸の商品化と批判されるボランティアツーリズムの倫理的問題点が浮き彫りになった。

研究成果の概要(英文)：This research aims to explore the cultures and experiences of Japanese orphanage volunteer tour participants in Siem Reap, Cambodia. Whilst little academic attention has been paid to the phenomenon, orphanage volunteer tourism in less developed countries has become increasingly popular among Japanese youth who do not have nurturing skills or international experience.

The research found that despite the strong motivation of participants to help, support and cheer orphans up, they became confused through interaction with them. This is because they gradually came to feel that they were rather cheered up by the orphans, who were naughty, cheerful and positive despite their unhappy history. This unexpected emotion forced the participants to reflect on their life so far, then humbly reconsider their future life. In conclusion, their volunteer experiences were egoistic rather than altruistic in nature, although they insisted on their contributions to the orphanages.

研究分野：観光学

キーワード：海外ボランティアツアー ボランティアツーリズム 孤児院 カンボジア 観光倫理

1. 研究開始当初の背景

近年、「ボランティアツーリズム」は観光活動の一形態として日本国内のみならず先進国各国で注目されている。注目される一要因は、今まで何ら問題とならなかった生活行動(買い物、休暇など)がモラルを要求される行動に変化しつつある昨今、国際社会の中で優位性を保つ先進国の国民が、開発途上国に対して感じる罪を国際貢献を通して買い取る役割を果たしていることにある(Butcher and Smith, 2010)。さらに、国際貢献という利他的な行動の結果得られる自己発見や自己成長(つまり、利己的な満足)を期待できることも、注目される要因である(Sin, 2009)。それはあくまでもツーリズムであって、ツーリズムの過程で何らかのボランティア活動を行う現象のことを指す。ボランティアツーリストが従事するボランティア活動の内容や期間、技術的力量の程度は問われない。

学術的には、ボランティアに関する研究は社会学的考察を中心に蓄積があるが、ボランティアツーリズムに関する研究は、Stephen Wearing の著書 “Volunteer Tourism - Experiences that Make a Difference-” が発表された2001年に始まり、その歴史は浅い。今までの議論は、ボランティア活動が盛んで、ギャップイヤー期間中にアジア・アフリカ・中南米などの開発途上国を渡航先としたボランティアツーリズムを行う者が多くいる英国とオーストラリアでのものが大多数であった。ボランティアツーリズムを用いたコミュニティ開発の手法とホストコミュニティの変容、さらにボランティアツーリストの動機、体験、変化に関して論じられてきた。動機に関する研究では、ホストコミュニティへの貢献という利他的な動機の有無が多くの研究で論じられているが、実際には多くの研究が利己的な動機の重要性を結論として指摘している。体験に関しては、参加者の自己発見や自己成長、社会や世界に関する理解や意識の変化をボランティアツーリズムの特徴として挙げている。変化については、ツアー参加前後の意識や行動の変化、特に社会貢献についての意識や行動の変化の程度が議論の焦点となっている(依田, 2011)。一方で、東日本大震災後に注目を集めた被災地ボランティアツアーに関するレポートは散在するものの、日本におけるボランティアツーリズムに関する学術的研究は、国外での研究動向をまとめた依田(2011)や大橋(2012)などに限られる。特に、国外へ渡航する日本人を対象としたボランティアツーリズムに関する実証的な研究は皆無である。上述の通り、国外の研究のみではあるが、ボランティアツーリズムに関する理論的な構築はある程度蓄積されている。しかしながら、ボランティアツーリズムをボランティアツアーとして商品化された観光現象の一形態と捉えて考察することは、今まで見過ごさ

れてきた。文化の「ほんもの性」や観光のサブカルチャーに関する議論など、観光の商品化に関連する議論は観光研究で活発に行われてきたものの、ボランティアツーリズムに関する議論はそこから離れていた。ボランティアツアーは支援を必要とする困窮状態にある他者の商品化や新植民地主義を助長する先進国のエゴイズムによって成り立っている「非倫理的な」ツアーである、と一部の国際人権擁護団体や研究者は主張している。このように、観光商品化されたボランティアツアーは倫理的なジレンマを孕んでいるものの、今までその現状や倫理的諸問題に関する学術的な考察は行われてこなかった。

[参考文献]

- 大橋昭一「ボランティア・ツーリズム論の現状と動向 - ツーリズムの新しい動向の考察 -」、『観光学』6、2012、9-20頁。
- 依田真美「ボランティアツーリズム研究の動向および今後の課題」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』12、2011、3-19頁。
- Butcher, J. and Smith, P.: 'Making a Difference': Volunteer tourism and development, *Tourism Recreation Research*, 35(1), 2010, pp27-36.
- Sin, H, L.: Volunteer Tourism - "involve me and I will learn?", *Annals of Tourism Research*, 36(3), 2009, pp480-501.
- Wearing, S.: *Volunteer Tourism - experiences that make a difference-*, CABI Publishing, 2001, pp.123-139.

2. 研究の目的

人気がある一方で孤児の商品化であると倫理的問題が指摘されている、カンボジアにおける孤児院での交流を目的とするボランティアツアーを事例に、日本人が参加する海外ボランティアツアーの文化やボランティアツアー参加者の経験などを考察する。

3. 研究の方法

(1) 既存文献整理

国外のボランティアツーリズムに関する既存文献の整理、国内および国外のボランティア研究に関する既存文献の整理、観光の商品化とその解釈、さらに後期近代における観光の特質に関する既存文献の整理、孤児院ボランティア(ツーリズム)に関する既存文献の整理、カンボジアの経済・社会・文化に関する既存文献の整理

(2) ボランティアツアー催行業者がホームページやFacebook等で公開している、孤児院での交流を目的とするボランティアツ

- アー参加者の体験談の分析
- (3) カンボジア・シェムリアップ市にあるボランティアツアーを受け入れている孤児院にて、参与観察並びに孤児院の管理者とツアー参加者へのインタビュー調査

4. 研究成果

- (1) 「海外孤児院ボランティアツアー参加者の経験と開発途上国に対する印象に関する考察」(立命館大学地理学教室編『観光の地理学』,文理閣,所収,2015年,281-303頁)

近年人気がある一方で、その新植民地主義的性格や孤児の商品化の面において倫理的問題が指摘されている東南アジア諸国での海外孤児院ボランティアツアーに参加した日本人大学生の体験記を分析し、ツアー参加者の孤児院での経験の本質と、経験を通して得られた開発途上国に対する印象について考察を試みた。ツアー参加者は孤児との交流を通して「不幸な過去を背負っているにもかかわらず、元気で無邪気、さらに素直で真面目」な孤児を目の当たりにして幸福に対する価値観の転換や、孤児と自己の生活態度を照らし合わせたうえでの孤児に対する尊敬と感銘の念、さらに自省の念に苛まれるようになる。このような自己の価値転換を強いられたツアー参加者は、孤児院でのボランティア終了後の観光活動においても「小さいことは素晴らしいこと」という開発途上国に対する美的感覚を伴ったまなざしを向けるようになる。このような連続した価値転換は「特別な経験」として認識され、自己発見・成長、さらにツアーに対する満足へとつながったが、それを根底で支えているのは「運命的な出会い」をしたツアー中に関わった人々との親密な関係性である。特に同じツアーに参加した日本人大学生の仲間は、「特別な経験」を共有し、さらにそれについて本音で語り合った仲間であり、彼ら彼女らの存在が有意義なツアー体験に対して極めて重要な役割を果たしていることが分かった。

- (2) 「孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判 - 英国主要新聞社による報道内容からの考察 - 」(『立命館文学』650号,2017年3月,59-77頁)

本稿はイギリスの主要新聞社がインターネットで配信する孤児院ボランティアツーリズムに関する報道の内容の分析を通して、孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判を考察した。孤児院ボランティアツーリズムを擁護する記事よりも、批判的に論じた新聞記事の方が圧倒的に多かった。孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾や批判は、以下の二点に集約された。一点目は、そもそも孤児院ボランティアツーリズムには、その概念に矛盾が見られることである。

具体的に言うと、ボランティアとは無償性や利他性が前提にあるものの、ボランティアツーリストには自分探し・自己成長といった利己的な動機が前提にあり、矛盾がみられる。二点目は、孤児院ボランティアツーリズムの企画・運営者が、孤児の社会的脆弱性の軽減よりも自己の利益の獲得を目的にビジネスとして行っていることが引き金となり、支援を受ける孤児にさまざまな悪影響が及ぼされていることである。人身売買や小児買春にさらされる危険性、孤児の感情の形成への悪影響などが挙げられる。結論として、利他性が伴うボランティア活動を、利己性が主張されやすい観光活動として行うボランティアツーリズムには、大きな矛盾が伴っていることが主張された。

- (3) 「リアリティ充足手段としてのカンボジア孤児院ボランティアツアーにおける演出とパフォーマンス」(『観光学評論』5号2巻,2017年9月,197-213頁)

本稿では、カンボジア・シェムリアップ市における孤児院で行われている日本人が参加するボランティアツアーを事例として、孤児院ボランティアツアーにおける演出とパフォーマンスについて考察を試みた。孤児院ボランティアツアーとは、ツアー参加者がボランティアという行為を通して孤児の貧困や不幸という「ダークネス」にまなざしを向け、さらに自身のリアリティを充足する、という一連の行為である。本来なら福祉施設の一形態である孤児院は観光資源の対極に位置付けられるべきものであるが、市場化・観光資源化されて観光者に開放されている孤児院も見られる。ボランティアツアーを受け入れている孤児院では、ツアー参加者がリアリティを充足したり自分の存在意義を再確認したりできるように、様々な演出がツアー催行業者や孤児院運営者によって行われ、さらにツアー催行業者や孤児院運営者の指示のもと孤児はパフォーマンスをしている。さらにツアー参加者自身も孤児院でのボランティア活動中、利他的・博愛的なボランティア活動実践者として相応しい振る舞いをするように自らを演出している。このようなことから(2)の研究と同様に、ボランティアツアーにおける利己性を伴った「ボランティア」活動に対する批判が主張された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 薬師寺浩之「リアリティ充足手段としてのカンボジア孤児院ボランティアツアーにおける演出とパフォーマンス」(『観光学評論』5号2巻,2017年9月,197-213頁)
- (2) 薬師寺浩之「孤児院ボランティアツーリ

ズムをめぐる矛盾と批判 - 英国主要
新聞社による報道内容からの考察 - 」
(『立命館文学』650号, 2017年3月,
59 - 77頁)
<http://www.ritsume.ac.jp/acd/cg/lt/rb/650/650PDF/yakushiji.pdf>

〔学会発表〕(計5件)

- (1) 薬師寺浩之「孤児院ボランティアツアーにおける孤児の貧困や不幸という「ダークネス」」(観光学術学会第4回研究集会, 観光学術学会, 和歌山大学, 2017年2月)
- (2) 薬師寺浩之「カンボジアにおけるボランティアツーリズムが地元にも及ぼす影響」(奈良県立国際交流委員会主催観光学国際セミナー「The Global-Local Nexus in Hospitality and Tourism」, 奈良県立大学, 2016年2月)
- (3) 薬師寺浩之「カンボジアの孤児院におけるボランティアツーリストの受け入れ動機に関する考察」(観光学術学会第四回全国大会, 観光学術学会, 阪南大学南キャンパス, 2015年7月)
- (4) 薬師寺浩之「カンボジアにおける孤児院ボランティアツーリズムの現状と倫理的諸問題」(グローバル化とアジアの観光研究会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2015年6月)
- (5) 薬師寺浩之「海外孤児院ボランティアツアー参加者の経験と開発途上国に対する印象」(グローバル化とアジアの観光研究会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2014年10月)

〔図書〕(計1件)

- (1) 薬師寺浩之「海外孤児院ボランティアツアー参加者の経験と開発途上国に対する印象に関する考察」(立命館大学地理学教室編『観光の地理学』, 文理閣, 所収, 2015年, 281 - 303頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

薬師寺浩之 (YAKUSHIJI Hiroyuki)
奈良県立大学地域創造学部 准教授
研究者番号: 70647396